

## 学位論文要約

論文題目 唐宋敦煌民間信仰研究

広島大学大学院総合科学研究科  
総合科学専攻  
学生番号 D116280  
氏名 林 生海

### 学位論文要約

本論文は、敦煌文献を中心として唐宋時代の敦煌民間信仰を分析したものである。

敦煌民間信仰についての先行研究は、仏教や道教を中心として扱うものや、民俗や俗信などを中心とした研究が多くみられてきた。そうした中で、様々な信仰の大枠を描き出すことには成功してきたが、「宗教」、「信仰」などの概念規定は不明瞭なままで、かつまたこの明確な概念に基づく研究が行われてこなかったために、仏教や道教といった枠組みの中に収められてしまうことが多く、本来的にその背景にあった信仰が重視されずに来たように思われる。実は、民間に息づく信仰は原始時代に発生した自然崇拝と祖先崇拝が核となり、社会の中で次第に発展変貌を遂げつつ宗教理解の背景に常に存在していたものなのである。

本論では、敦煌文献を中心として唐宋時代の敦煌の民間に息づく信仰を分析した。その際、中国の信仰を取り巻く漢語と言う言葉と文字、政治的力、民間の力、外来宗教の受容等に着目し、さらにそれを(1)敦煌の山岳信仰と仏教、政治体制、(2)浄土信仰に見られる「帰去来」と「大聖変」、(3)敦煌講唱文学に見られる三夷教の影響、(4)敦煌文献に見られる言霊信仰、の四つ課題として重層的に検討を加えてきた。

本論の序言から第五章を各章毎にまとめると以下のとおりである。

#### 序言

研究対象と概念について検討した。「信仰」と「宗教」という概念について改めて考え、宗教受容の基礎にある民間に息づく信仰という考えから「民間信仰」、「民間宗教」、「民俗信仰」などという従来の概念を整理した。宗教 (religion) という概念を多用する風潮に対し、古代中国人信仰を検討するうえでの新たな視点を提示することができたのではないかと考える。

#### 第一章 金山国の背景に見られる敦煌の山岳信仰

アニミズムや自然崇拝は民間信仰の起源であり、中でも山岳信仰は自然崇拝の重要な発展段階であると考えられる。こうした信仰は古代ばかりではなくのちの時代にも人間の精神世界に生き続けており、敦煌の民間信仰にもこうした山岳信仰が生き続けている。本章では、金山国の成立と山岳信仰の関係について検討し、唐末五代期における自然崇拝の状況と、政治支配への影響について考えた。

金山国とは、唐帝国が滅びた後に沙州(敦煌)を中心として建立された地方政権である。その金山国では国名とつながる金山信仰が盛んであったとされる。ただ、金山が実は敦煌近くの山であり、金山信仰が山岳信仰の一種であったことについては、現在の学界はあまり関心を払われたことがない。ただ、最近荒見泰史氏のフィールド調査により敦煌三危山が鳴沙山とともに古来敦煌で信仰されてきたことや、敦煌の仏教信仰が山岳信仰から転化されたことが指摘され、敦煌に山岳信仰の土壌があることが明らかにされている。また日本の山岳信仰の特徴と「山岳宗教」という概念が、同様に唐宋敦煌の山岳信仰の理解に役に立つと考え、本章では、これらを参考としながら、金山国の背景に見られる敦煌の山岳信仰について、敦煌の山岳信仰と仏教、政治支配の手段という角度から検討を加えている。

## 第二章 「帰去来」から「大聖変」へ—唐宋時代浄土信仰の一側面—

本章では、宋の洪邁『容齋隨筆』の「絵画帰去来者、皆作大聖変」(帰去来が絵に描かれるとみな大聖変と作る)の一句から、唐宋時代に流行した「帰去来」という言葉について検討した。陶淵明の『帰去来の辞』は人口に膾炙し、敦煌文献や同時代の伝世文献においても様々な「帰去来」と題する句が歌われる。その中でも西方浄土を宣揚する浄土讃として「帰去来」が盛んに歌われていたことは信仰の民間への滲透を考える上で興味深い。これより見るに、当時「帰去来」は、すでに阿弥陀信仰に溶け込み、浄土信仰の用語になっていたことがわかるのである。先の「絵画帰去来者、皆作大聖変」は陶淵明の『帰去来の辞』と関わってはいるが、実は「帰去来」浄土讃流行の影響を受け、「大聖変」つまり阿弥陀浄土変相の俗稱になったことを指しているのである。こうしたところから、仏教の流行が中国文化と互いに融合していく状況がわかるのである。

## 第三章 敦煌写本『降魔変文』より見た三夷教の要素

仏教は漢代に伝来して後、中国の儒家、道教等と融合しつつ、唐代には儒家と道教とともに三教という主流の地位を得るようになったが、この時期、他にも外来宗教の三夷教(祇教、景教、マニ教)が王朝から伝教の許可を獲得するようになり、各自で寺院を建立し、経典を翻訳して流行した。外来宗教が中華文明に何らかの影響を与えるのは当然のことであるが、仏教の影響はしばしば論じられても三夷教の影響について言及されることはあまりなく、仏教のように通俗文学に入り込んだかどうかはいまだによくわかっていない。

本章では『降魔変文』の表現や観念等は、儒、仏、道三教の思想では理解しがたく、む

しろ三夷教に関わっているという考えを述べている。変文中の「外道」が僧侶と共に「和尚」を呼ばれているのは、おそらく三夷教が中国へ伝教する時、仏教の影響を受けたからである。敦煌には『降魔変文』の物語をもとにした大量の「労度差門聖変」という壁画が残されるが、舍利仏は労度差と幻術を用いて闘うのは、西域で流行した幻術の様子に近い。写本間との相違を比べてみれば、変文は儒家、仏教、道教三教を基にはしているが、外来宗教としての三夷教も参考になったとみるべきである。三夷教の特徴は、『降魔変相』という絵巻中の獅牛対戦図や外道の人物像等にも見られる。『降魔変文』は娯楽的な形で、当時の人々の好みに迎合したものであろう。つまり、『降魔変文』の中の様々な外来物の形は、多元文化をもっている敦煌で生まれたばかりでなく、敦煌民間信仰をも反映しているのである。

#### 第四章 敦煌文献に見られる言霊信仰

言霊信仰とは、もと日本語の概念であり、日本文化中の一つ特色とされてきた。しかし、敦煌文献を掘り見るに、古代中国にもこのような信仰があったと考えられる。本章では、日本の言霊という概念を借りて、敦煌文献に見られる言霊信仰について論説した。その内容は古代中国の民俗、儒家や宗教や政治などにも関わっている。当時の敦煌における言霊信仰は理性的なものとそうでないものが混ざって見えるが、こうした信仰は民俗礼儀と信仰観念の組み合わせられた結果だと考えられる。

以上の部分が本論文の主たる内容である。これらによって、国家祭祀ではない9、10世紀の民間信仰には、神祇地位の昇降と政治変化の関連、民間信仰は儒家と仏教と道教などとの融合、あるいは民間信仰の娯楽性と庶民生活など、政治、国家宗教、民衆の生活など多様な要素が反映されていたことを明らかにできるであろう。

以上のように、敦煌民間信仰について筆者独自の角度により整理を行い、各種の宗教を受け止める土台となってきた民間信仰についてまとめてきた。限られた事例に対するものではあるが、漢語と言う言葉と文字、政治的力、民間の力、外来宗教の受容等という筆者の着目した点については十分議論できたと思う。本論の成果をもとに、この四つの角度から民間信仰の神々の系譜をさらに事例ごとに整理し、また広く東アジアの面でこれらをとらえる為に日中民間信仰の比較的研究を進めるなど、より広がりを持たせることが必要となろうが、それらは今後の課題としたい。